

1 研究主題 「自ら考え、ともに学び合う子の育成」 —算数科を中心として—

2 主題設定の理由

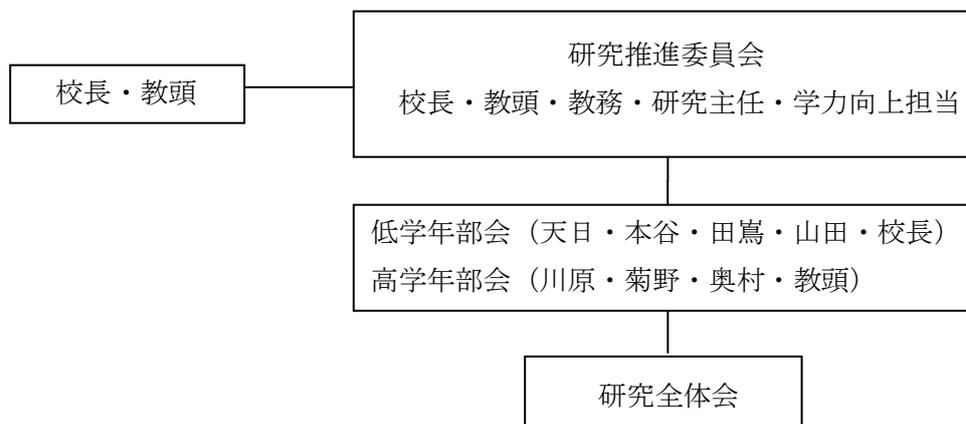
予測困難な時代をどうやって生きていくか。それには、主体的に自分で考え、それを伝え合い、考えを再構築し、自分で決定していかなければならない。私たちは、各教科・領域の中で、自分で考え、伝え交流し合い、自分で決定できる子ども達を育てていくことが求められている。これは、本校の研究の精神と合致するものである。

本校児童は、小さい頃から同じ集団で育ってきていることから、仲が良い反面、人間関係が固定化したり、友達の意見に流されたりしやすい面がある。学習においても、真面目に取り組んでいるが、主体的に学ぼうとする児童は、まだ少ない。つまり、自ら考え、友達と関わりながら学び合い、自分で決定していく力が十分についているとは言えない。したがって、研究主題を「自ら考え、ともに学び合う子の育成」とし、自ら主体となって学ぶ児童を育成していきたいと考える。

昨年度は、算数科を研究教科の中心に据え、学習意欲の向上と確かな学力の向上、とりわけ根拠や筋道を明確に表現する力の向上を目指し、授業改善に取り組んできた。成果としては児童が意欲をもてるような問題・問題提示の仕方を工夫することにより、児童が解決したいという意欲を高めることができた。また、話し合いの際に自分の考えを自分の言葉で話す児童が増えつつある。さらに、ペア学習の話し合いを効果的に取り入れることができるようになった。グループ学習の形態の有効性の共通確認も始めている。しかし、児童自身が、学び方を選択していけるまでには至っていない。また、全国学力学習状況調査の結果を見ても、基礎的・基本的な技能の定着、及び思考判断表現力を鍛えていかなければならないと考えている。

今年度も、引き続き、算数科を研究教科の中心に据え、前年度に引き続いて、根拠に基づいて自分の考えを筋道立てて説明できる力を育成する。また、「主体的・協働的な学習」についてさらに研究を進めていく。学力の3要素の中でも、態度・意欲は大変大事な要素であると考えている。児童の考えたい、話したいという学習意欲が向上すれば、学力の向上に結びつくであろう。学習意欲を向上させるような教師の手立てや働きかけも大事にしていく。「いしかわ学びの指針 12 か条【学びの 12 か条+】」を重点化して、確かな学力の向上を図りたいと考え、本研究主題を設定した。

3 研究の組織



4 研究構想図

〈学校教育目標〉 自らの生き方を主体的に拓き、心豊かにたくましく生きる児童生徒の育成

【研究主題】 自ら考え、ともに学び合う子の育成
—算数科を中心として—

【研究を通してのめざす児童の姿】

- 多様な観点から考える子
 - ・物事をいろいろな視点から考える。
- 主体的に学ぶ子
 - ・自ら課題を発見し、主体的・協働的に解決しようとする意欲をもつ。
- 自分の考えを持ち、表現する子
 - ・自分の考えをもち、相手を意識して考えの根拠や筋道を明確に表現できる。
- 学び合い深め広げる子
 - ・より良い解決に向かうための質の高い学び合いのプロセスを経て、自分の考えを再構築することができる。

授業改善

【研究内容1】「？」→「わかった」の授業

- ・「？」のある授業
 - ？の生まれるような問題・活動や提示の工夫
- ・学び合いのある授業
 - ゆさぶり・問い返し発問の工夫
- ・「わかった」のある授業
 - 適用・活用場の設定、ふりかえりの充実

【研究内容2】主体的・協働的に学ぶ授業

- 自分の考えをもつ→自分の考えを交流する→
自分の考えを深め広げる→自分の考えを再構築する
- ・学習形態の工夫
- ・ペアやグループ学習の際の共通確認・共通実践
- ・児童に学習形態を選択させる

学びの指針
5条・6条

学習意欲の向上
根拠や筋道を表現する力の向上
学び合いの質の向上
学力の向上

学びの指針
1条・2条・3条・4条・
5条・6条・7条

学び合える基盤づくり

学び合える学習集団づくり

- ・学びの姿勢づくり・北前プロジェクトの継続実践
- ・聞く・話すスキルの向上
- ・主体的な学びを育てる教師のスキルアップ
- ・めざす授業像の共有・学び合うよさの共有

算数的なスキルの定着

- ・算数用語の習得
- ・絵や図をかくスキルの習得
- ・知識・理解

学びの指針
4条・8条・
9条・10条

学びの指針
5条

温かい学級づくり

生徒指導の三機能がある学級づくり

検証 ○ノートやプリント等、日常の児童の記録の分析から
○評価問題の到達度から

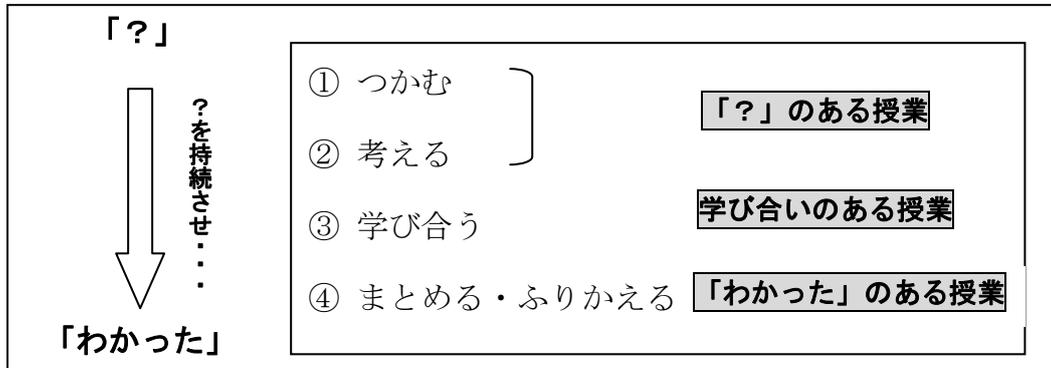
学びの指針
11条・12条

5 研究の内容

(1) 授業改善

① 「？」→「わかった」の授業

学習意欲の向上と根拠や筋道を表現する力の向上のためには、考えたい・解決したい課題であることが大事であるとする。そのような課題を自ら解決していく中で交流し合い、認められ「わかった」「できた」「やった」と児童が実感でき、さらに学習意欲が高まるような授業づくりをしていく。



ア. 「？」が生まれるような問題・活動や提示の工夫 **「？」のある授業**

「考えたい」「解決したい」という意欲を向上させるには、「どうしてだろう」「ちょっと分かるけれど・・・」と「？」が生まれるような問題を設定する必要がある。既習を生かして解けそうな問題、児童の生活の中にある問題、発展して考えたいような問題、ゲームなどの操作活動を取り入れた問題など、問題・活動を工夫する。

また、問題の提示の仕方次第で「？」が生まれる場合もある。絵や図や表・グラフの一部を隠す方法、不備がある課題を提示する方法、よくある生活場面の設定で提示する方法、既習から徐々に未習へと入っていく方法など様々に考えられる。

児童から出された「？」を全員で確認し、本時のめあてとして板書し、一時間で何を考えていくのかを明確につかませる。

イ. ゆさぶり・問い返し発問の工夫 **学び合いのある授業**

授業の「つかむ」段階で生まれた「？」を継続させるために発問や声かけを工夫していく。「なんで？」という問い返しの発問や、教師が誤答を提示する、子どもの発言をわざと聞き間違えるなど、ねらいに迫るための思考を深めるゆさぶりの発問を工夫する。

キーワードを自ら発見させ、考えの根拠の共通点や相違点を明らかにしながら、確かな根拠をもって自分や集団の考えを再構築していけるようにする。

ウ. 適用・活用場の設定 **「わかった」のある授業**

適用題・応用問題を解く時間を必ず設定する。適用問題に取り組む場合と、学力調査 B 問題で求められているような力を付ける応用問題に取り組む場合とがある。それについては、ねらいに合った問題にする。個人差に応じて、教科書巻末の補充問題に取り組む。説明の仕方が示されていて、それを生かして書く問題も、意図的に取り入れていく。

オ. できるようになったことを自分で自覚化できるようにするふりかえり **「わかった」のある授業**

児童自身の変容を自覚化できることで、学ぶことの意味を感じ、次への学習意欲にもつながると考える。ふりかえりは「一時間でわかったこと・できるようになったこと」「次に使えそうなこと」「参考になった友達の考えのよかったところ」「生活で使えそうなところ」を書かせる。

②主体的・協働的に学ぶ授業

困難な課題に出会った際、自分で情報にアクセスして情報を読み、自分で考えをもち、それを交流して、根拠をもって自分の考えを再構築し、行動していかなければならない。そのためには、授業の中で、課題に対して、主体的・協働的に解決していけるような児童を育てることを求めている。またよりよい解決に向かうためには、より質の高い学び合いが必要になってくる。

算数科に限らず、様々な教科で話し合う必要感のある課題を設定し、主体的・協働的に課題解決する場を意図的に組み込んでいく。

ア. 学習形態の工夫

ペア学習のよさ、グループ学習のよさ、またその弱点などをよく考慮し、ねらい達成のための学習活動や学習形態を意図的に取り入れていく。多様な考えを出し合うのか、最適解を話し合うのか、ねらいをはっきりさせ、ねらいに迫るための学習活動にしていく。

イ. ペアやグループ学習の際の共通理解・共通実践

教師間だけでなく、児童にも、どんなときにペアで話し合うとよいか、グループで話し合うとよいかを共通理解していく。ペアやグループで話し合う際は、ノートを真ん中において話す、指さしながら話す、全部を話さずに確認しながら話すなどのことを確認する。

ウ. 学習形態を選択させる

自分たちで課題解決していける児童を育てるためには、自分たちで学習形態についても決めさせていく場も作っていく。ペア学習か、グループ学習か、全体か、児童自身が学び方を選択し、児童自ら主体となって学習を進めていく。様々な学習形態の有効な場面を教師と児童とで話し合い、確認し合い、具体的な場面でどの形態がよいのか選択していく。

(2) 学び合える基盤づくり

①学び合える学習集団づくり

ア. 学びの姿勢づくり・北前プロジェクトの継続的实践

学び合う授業を創るには、学習規律が大切である。時間を守る・学習の準備・姿勢・話し手の方に体を向けるなどのことを基本とし、教師それぞれがもっている指導のよさを出し合い、共通理解を図った上で、学校ぐるみの取り組みをしていく。昨年の「北前プロジェクト」を継続し、『①授業は自分たちの声でスタート②自分から手を挙げてハリのある声で③「聞いたよ」の反応』の実践に取り組んでいく。そうすることによって、教科が変わっても学年が変わっても全校の共通実践にし、主体的に学習する姿勢や態度を育てる。

イ. 聞く・話すスキルの向上

算数科の時間だけでは、聞く・話すスキルは向上しない。従来より取り組んできた『6つの話し方のめあて』、『4つの聞き方のめあて』を確認しつつ、他教科においても話すことを求めている。その際、使うとよい言葉が出てきたときに、それを価値づけ、カード等で提示し、視覚化する。

朝の会のスピーチや詩の音読・群読も、学校全体で取り組んでいく。

ウ. めざす授業像の共有・学び合うよさの共有

教師と児童が自分たちの目指す授業像を出し合い、折に触れてふりかえり、目標に向かって進むことが主体的に学ぼうとする姿勢につながっていく。

エ. 主体的な学びを育てる教師のスキルアップ

学び合う場面での教師のスキルのさらなる向上が求められる。子どもの発言を拾い、全体に広げる工夫、思考を促す発問の工夫、児童の意欲を高める教材の開発、どのような意見がどのような順序でだされても、ねらいに迫ることができるように、教師のスキルアップや瞬時の対応力を高めていく。

②算数的スキルの定着

算数の用語や絵や図をかくスキルを習得させ、それを活用できるようにしていく。

ア. 算数用語の習得

用語やキーワードを習得させ、既習を生かして課題解決に取り組む。各学年、各単元で指導したい用語やよく使う用語はカードにしておき、いつでも使えるように教室に掲示し、説明する際に意識して使えるようにしていく。

イ. 絵や図をかくスキルの習得

テープ図、線分図、数直線図など、その学年、単元で身に付けなければならない絵や図の意味やかき方を指導し、その後もスキルとして使えるようにしていく。

6 研究計画

- ・ 全員授業公開する。
- ・ 全体授業を各学年 1 回ずつ行う。(計 6 回)
- ・ 指導案検討や模擬授業、実践、授業整理会を通して、教材や指導過程・指導方法について研究する。
- ・ 指導主事から助言を頂く。

4 月	・ 研究計画の作成 ・ 13 日 (水) 研究全体会 (今年の研究計画)
5 月	・ 研究全体会 (主に、今年度の研究の柱の確認) ・ 全国学力調査・基礎学力調査 第一次分析
6 月	・ 模擬授業 (5 年) ・ 全体研究授業 (5 年) ・ 模擬授業 (3 年)
7 月	・ 要請訪問 (3 年)
8 月	・ 研究全体会 (2 学期からの研究の重点について) ・ 全国学力調査・基礎学力調査 第二次分析 ・ 小中合同研究会 指導案検討・模擬授業 (1 年) ・ 模擬授業 (6 年)
9 月	・ 計画訪問 (6 年) ・ 小中合同授業研究会 (1 年)
10 月	・ 模擬授業 (2 年) ・ 全体研究授業 (2 年)
11 月	・ 授業交流週間 ・ 模擬授業 (4 年) ・ 全体研究授業 (4 年)
12 月	・ 研究全体会 (3 学期の研究の重点について)
1 月	・ 授業研究 ・ 授業交流週間
2 月	・ 研究のまとめ
3 月	・ 次年度に向けて